

理其ものの如何に依るのである。

第二には調和の廣さ即ち表はさるべき眞理の數に依る、大畫家が二派をとつた

一はポールヴェロニス、チチアン、ターナーを首領とも見るべき、重に色彩に關して描くものと他の一派は色彩に重きを置かずして、明と暗とに重きを置くものであつてレヲナルド、ダ、ウキンチ。レンブランド。ラファエルが其首領である。

レヲナルド等の繪畫は、多くは比較的色彩の乏しき暗灰色又は褐色等の蔭影によりて毀たれる、これ等の畫家は明部より初めて暗部に終はる、しかしターナー等のは其畫が前にいつた薔薇の花の様に、蔭の部分にも色が富んでゐて、漸次弱く高向なる色彩に遷り行くのである、これらは蔭に初まりて明部に終る。色彩を精確に研究するものは形の上にも其力を加へる事が出来るが、形を研究したものは色彩の上に其力を及ぼすことは出来ない。されば桃の實で鼠色、紅、紫の幾種かを認め得る人は桃を正しく圓く描くことが出来るが、形態の圓さのみに就きて研究した人は紫、鼠、等を認めることが難い、若しそれが認められぬとしたら、桃の實と見せる事が六ヶしい。(ラムキン氏『近世畫家』より)

日本水彩畫會新會友

鳥取縣東伯郡由良宿

遠藤勝之助

神戸市兵庫東柳原五七、丸山方

塚崎繁夫

寄書

余の水彩畫の初め

秋田 綠葉 生

余の水彩畫の習ひ初めと云ふものは忘れもせぬ三年前の昔高等小學校四年級の時分の事である。其れは今の今まで鉛筆畫のみを書いていたのが初めて其れに彩色を施してあるのを學ぶ様になつたのだ。其時の愉快な事と云つたら實にたとへ様もない程であつた。此れより以後と云ふものは面白まぎれに臨本と云はず雑誌の口繪と云はず餘暇ある度毎に怠らずに描いて居た。其時分は恰も日露戰爭の眞最中の事として色々なる雑誌が發行せられた。分けても戰事畫報や日露戰爭畫報等は余の心を動かしたのである。やがて此年も暮れ四十年の新天地を迎えて中學一年に入學する事となつた。扱て中學校では淺井忠氏著の鉛筆畫手本だ然し余は之れでも暇ある毎に繪具箱を開かない時はなかつた。或日意外にも若松さんと云ふ人から自筆繪葉書が來た之を見た余は一種云ふ可らざる考が胸を刺激した其れと云ふものは云ふまでもない『吾も斯の如く上手になりたいものだナ：』『然し人間は何事も勉強せれば上手になれるものでないだから吾々もこれより一生懸命になつてやらう』と思ひ、之からは前よりも一層勉め勵んだ。或日自筆繪端書を彼に送つた三四日過ぎて返事が來た。曰く「先日下された端書は大變よく出來た。然しまだ／＼色の塗り様や形の取り様が完全でない。だから今